

令和元年10月号



加納鑑子は最後の「一宮藩主・加納久宜(1848~1919)の妻で、万延元年(1860)、原三蔭の次女として生まれました。久宜との間には久朗元千葉県知事など三男七女をもつきました。

明治35年(1902)、東京府入新井村(現東京都大田区大森)に在住していた時、久宜が自宅を事務所として入新井信用組合(現城南信用金庫)を創設すると、鑑子はその事務を補佐したといわれています。

明治43年(1910)に一宮町婦人会が発足すると、その初代会長に就任します。大正2年(1913)に久宜が私立一宮女学校を設立すると、講師となり女子教育に励んだといわれ、一宮の発展の一端を担いました。

なお、入新井村時代の加納家の生活は、明治38年(1905)に中村鈴子の『家庭の模範』という本で紹介されています。この本は華族・名

士・軍人の各家の模範となるべき事例を紹介したものであり、そこに取り上げられているほどですから、全国的にも優れており、著名だったことがうかがえます。

大正8年(1919)に久宜が亡くなった後は、娘の夏子が嫁いだ大分県の麻生家をしばしば訪れていたことが、『麻生太吉日記』(※)からうかがい知ることができます。

昭和22年(1947)死去。享年87歳。

※麻生太吉(1857~1933)麻生商店社長ほか。現財務大臣、麻生太郎氏の曾祖父にあたる。夏子の義理の父親。

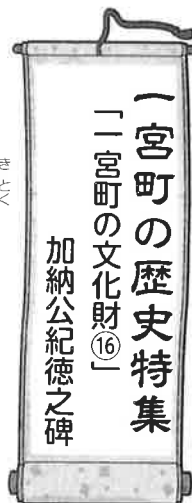


▲ 加納鑑子(町教委所蔵)

(町教育委員会 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

令和元年11月号

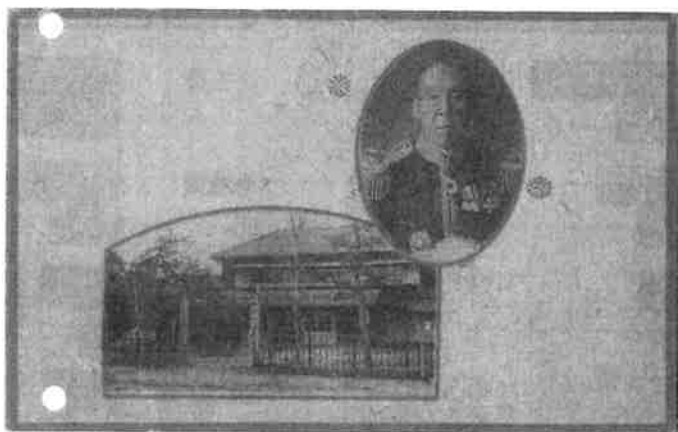


加納公紀徳之碑は、最後の「一宮藩主」一宮町長もつとめた加納久宜(1848~1919)の功績を称え、生前の大正7年(1918)に建てられました。当初は旧一宮町役場前(観明寺境内)に建っていましたが、昭和63年(1988)に現在の振武館駐車場へ移動しました。平成2年(1990)に町の指定史跡に指定されています。

大きさは幅2m、高さ3メートルで、久宜の業績について約6000字の漢文が刻まれています。撰文は後藤新平(1857~1929)、満鉄初代総裁、外務大臣ほか、書は野村素介(1842~1927)、貴族院議員ほか)によるものです。扁額は徳川家達(1863~1940)、貴族院議長ほか)によるものであり、当代の著名人がこの石碑の制作に関わっていたことがわかります。



▲ 加納公紀徳之碑



▲ 絵葉書「加納久宜と一宮町役場」戦前の絵葉書。役場写真の左側に石碑がみえる。

(教育委員会 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416